

「特別な教育ニーズのある生徒に、高等学校はどのような支援ができるか」

話題提供 （明蓬館高等学校・吉田敏明・村上智美・高橋香帆）

タイトル 「高等学校における社会的障壁をなくすための支援と伴走」

特別な教育ニーズのある生徒の中でも特に発達に特性のある生徒を特別な教育ニーズのある生徒と取り上げることがしばしばありますが、本学には発達の特性のある生徒を含む多様なニーズのある生徒が進路の選択肢の一つとして来室されます。

元来、高等学校は特別支援の制度が十分に整備されておらず、個々の教員の努力に依存していたように感じています。本学においては職員体制の枠組みから抜本的に見直し、一人の職員に一極集中型の支援体制ではなく、組織的かつ安定的、未来志向的な支援体制の構築を 2013 年から目指して、学習支援施設として Special Needs Education Center、略して SNEC（すねっく）の体制作りをしてきました。本学には教員を支えるためにコーチングスキルを持った支援員、公認心理師や臨床心理士などの相談員を配置し、①三位一体での支援を全校配置し、各学習センターで②心理アセスメントの実施体制の確保及び、本学独自のアセスメントツールの開発、それに基づく③個別教育支援計画・指導計画の作成、並びに体系的な関係機関との連携方法を SNEC Method として体系化しています。これら 3 つの観点を大切にし、全職員が同じ Core Value を共有し、それぞれの専門性を繋ぎ、支援と伴走が提供できる環境づくりをしています。



2021 年度からはゲーム依存傾向がある生徒を対象にした CONEC（こねっく）、さらには心理支援を必要とする中学生を対象にした中等部を開室し、SNEC で培ってきた支援と伴走の環境をより多様な特熟な教育ニーズのある生徒たちに提供できるようになりました。

【事例①】 小学 2 年生から学校に通わなかった人が苦手な A さんのケース

小学 2 年生の 5 月に担任の先生が別の生徒を注意したときの大きな声が自分に向いていると訴え、学校へ足を運びにくくなった。小学 6 年生から本学に通い始め、最初は特定の先生との信頼関係を築き、次第に広く大人とコミュニケーションが取れるようになりました。卒業後は福祉サービスの利用をして、就職に向けた準備を進めていけるように準備を進めています。

【事例②】 小学 4 年生から引きこもってゲームを 1 万時間以上していた B さんのケース

小学 4 年生から引きこもって、ゲームを繰り返しプレイしていました。全国大会等にも出場するも、生活リズムの乱れから家族や友人関係もうまく行かないという主訴から本学に通い始めました。エシカルハッカーという職業に興味を持ち、CONEC のサイバーセキュリティ講座（特例子会社を持つ企業との連携事業）に参加し、卒業後はサイバーセキュリティの部門を持つ会社に就職が決まり、現在はサイバーセキュリティの第 1 戦で活躍をしています。